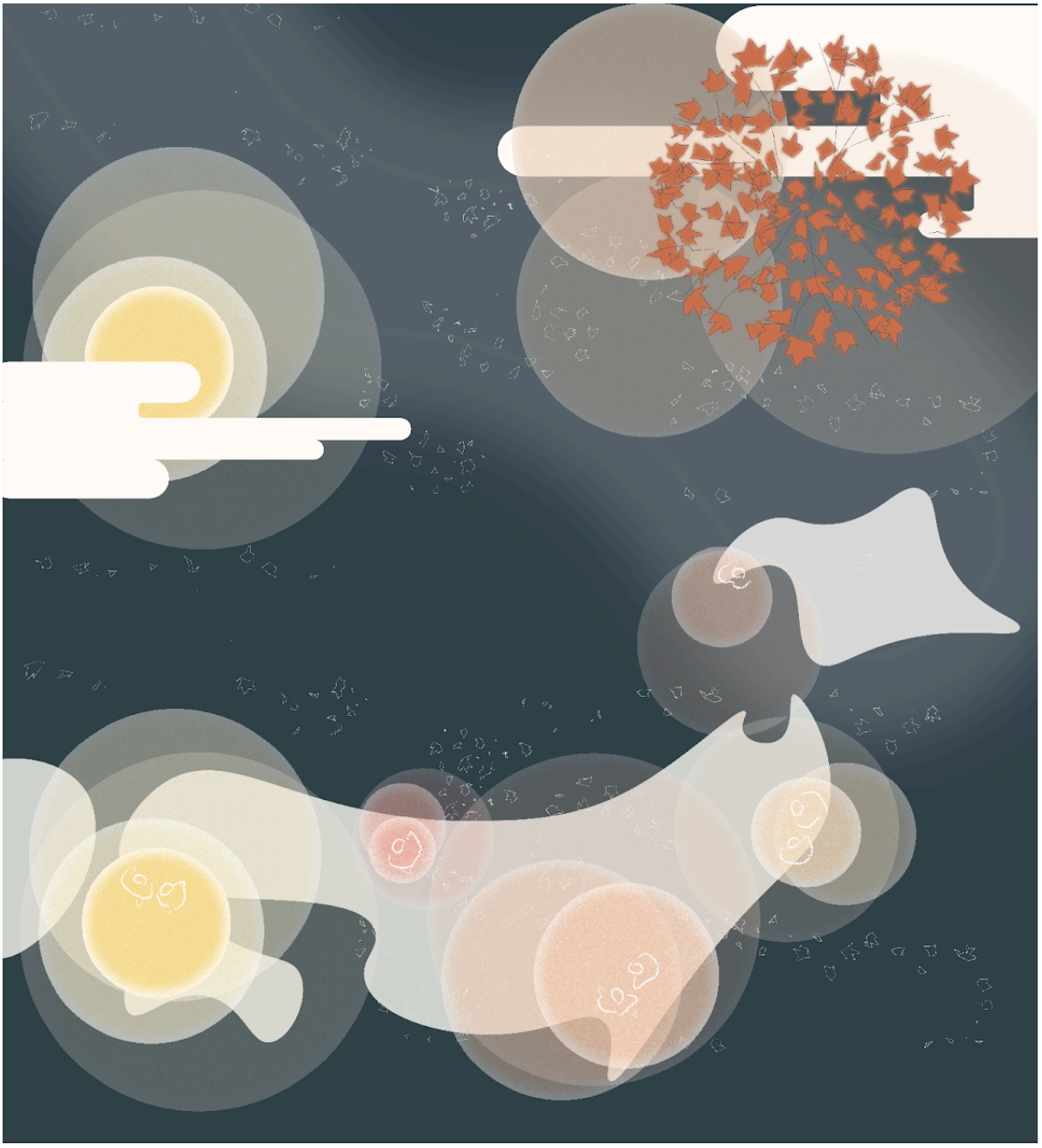


私のまちで東京ストリートカウント　2024 秋　- おなじ月の下を歩く -

活動報告

ARCH
through Community Design

◆はじめに

ARCHは2024年9月20日/21日の深夜、「私のまちで東京ストリートカウント2024秋-おなじ月の下を歩く-」を実施しました。本企画は多くの市民が同じ夜に、それぞれの暮らすまち、地元駅や公園を歩いて実施する、市民参加型の夜間路上実態調査です。

市民一人ひとりが「私のまち」にいるホームレスの人や行き場のない人に出会い、その記録や感じた想いをオンラインにより参加者間で共有します。見守りのまなざしで深夜の自分のまちを見ること、そして他の多くの参加者と共に都市全体を見守ることを目的としています。

今回初めての秋開催となりました。酷暑を乗り切り、過ごしやすい季節となり始めた中秋の名月の頃行った今回の調査の実施概要、調査結果、参加者の感想についてご報告します。

目次

◆開催概要 …2
◆当日の流れ …2
◆主な調査結果 …3
〇まちごとの結果
〇全体としての結果
◆参加者層 …7
◆参加者の感想 …8
〇新たな質問の分析 ～経験の共有～
◆今後に向けて …12

◆開催概要

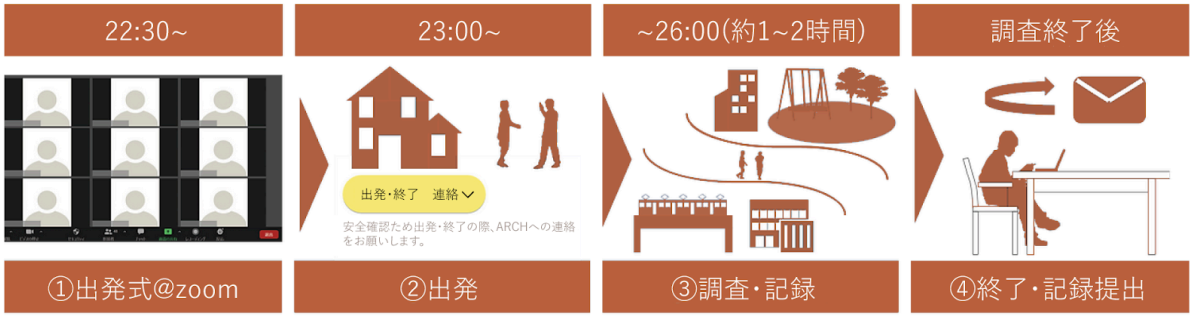
日時	9月20日（金）深夜	9月21日（土）深夜	別日
場所	各参加者の「私のまち」（自宅のある地元駅周辺、近隣の公園など）		
天気	晴れ	雨	—
最低気温	27.9℃（東京都）	22.5℃（東京都）	—
参加者数	27	26	17
同伴者数	8	1	—
見守った「私のまち」	46		
出会った人 調査したもの	「野宿している人」「確かではないが今夜行き場がなくてここにいると思われる人」 「それ以外で心配な状態にある人」「野宿している人のものと思われるテントや小屋、荷物」		

※両日参加5名

1日目はまだ夏の暑さが残りじんわりと汗ばむ夜、2日目は広い範囲で雨雲に覆われ冷たい雨に降られる夜となりました。一日目27名、二日目26名、他日17名、合計70名の参加者がそれぞれの「私のまち」を見守りました。他にも、参加者と共に9名の同伴者（参加登録なし）が歩いてくれました。

参加者みなで見守った「私のまち」は合計で46となりました。安定しない気候の中で心配な状態にある人がいないことを祈りながら、「野宿している人」「今晩行き場がなくここにいると思われる人」「それ以外で心配な状態にある人」との出会いを記録しました。

◆当日の流れ



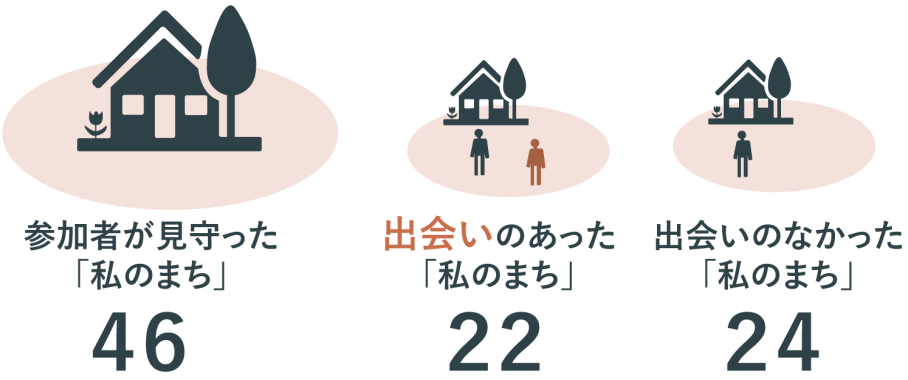
【図】当日の流れ

当日は22:30からzoomで出発式を行い、他の参加者と共に注意事項を共有し、その日の夜一緒に歩く仲間の様子を確認しました。23:00以降に各自で調査を開始し、参加者はそれぞれの「私のまち」を1～2時間程度歩き、出会った人や置かれている荷物の記録を行いました。
帰宅後、見守った記録（歩いたルート、出会った人・記録したモノ、感想）を本部へ送信し、他の参加者とお互いの感想をオンラインで共有しました。

◆主な調査結果

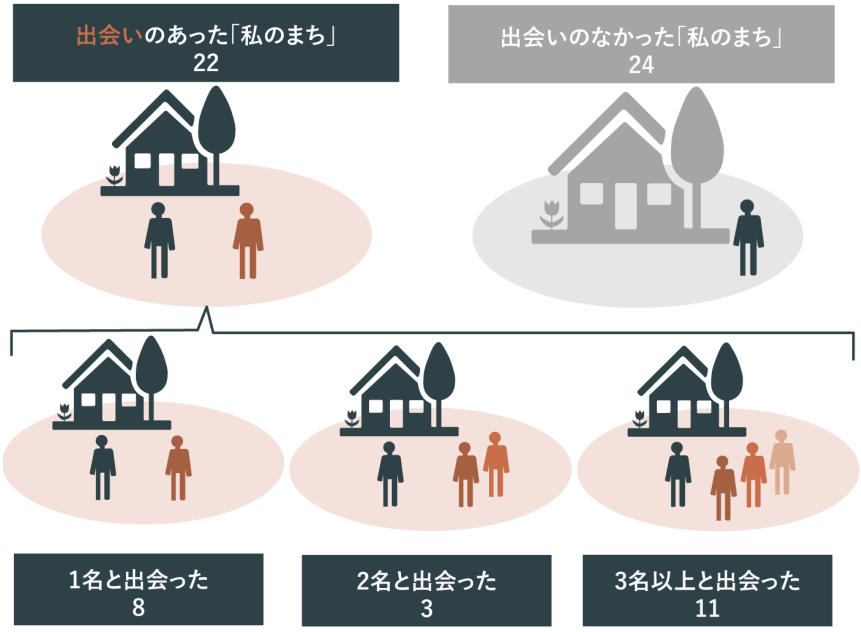
〇まちごとの結果

参加者延べ70名で見守った「私のまち」は46ありました。見守った46の「私のまち」のうち半数近い22のまちで何らかの心配な状態にある人との出会いがありました。出会いのあった「私のまち」の割合を過去2回の開催と比較すると、2022年夏開催では約7割、前回開催と今回は半数弱と、減少傾向にあります。



【図】出会いのあったまち・なかったまちの数

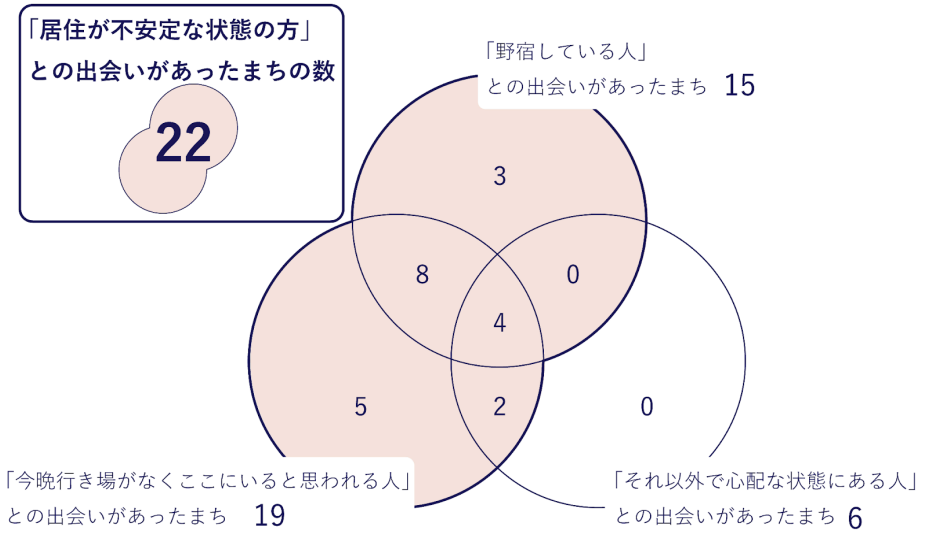
出会いがあった22のまちにおける出会った人の人数をみると、1名だけと出会ったまちが8、2名と出会ったまちが3、3名以上と出会ったまちが11となりました。終電後に人があまり出歩いていない静かな住宅街でも心配な状態にある人が多数確認されました。



【図】出会いがあったまちの数（出会った人数別）

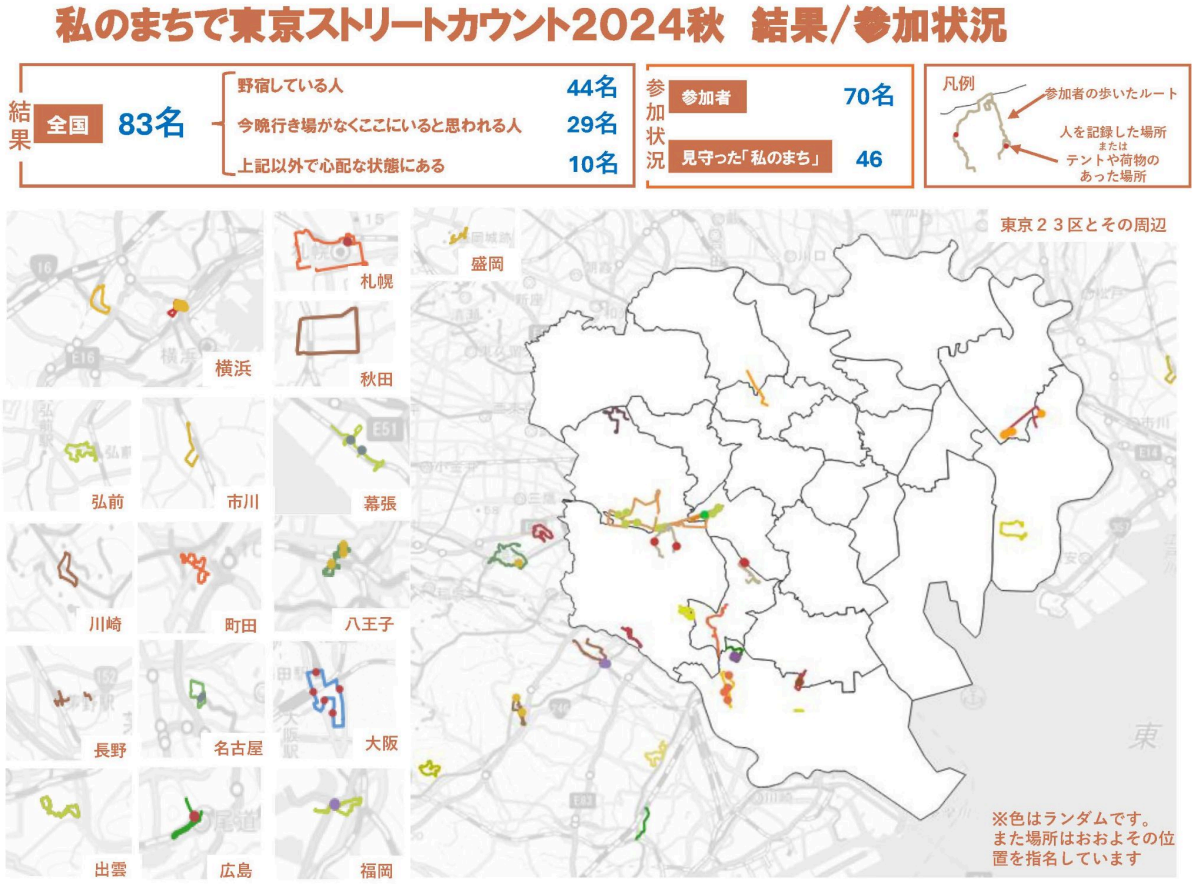
次に、どのような状態の人に出会ったのかをみると、「野宿している人」との出会いがあったまちは15、「確かではないがあ今晩行き場がなくここにいると思われる人」との出会いがあったまちは19、上記のいずれかの人に出会ったまちは22でした。

「野宿している人」あるいは「確かではないが今晩行き場がなくここにいると思われる人」は、少なくともその晩は屋外での不安定な居住状態（広義のホームレス状態）にある人であり、参加者が見守った46のまちのうち、半数弱の街でこうした居住が不安定な方と出会ったことになります。



【図】出会いのあったまちの数（状態別）

○全体としての結果



【図】調査結果まとめ（参加者の歩いたルートと出会いのあった場所）

上図は調査結果をまとめたものです。

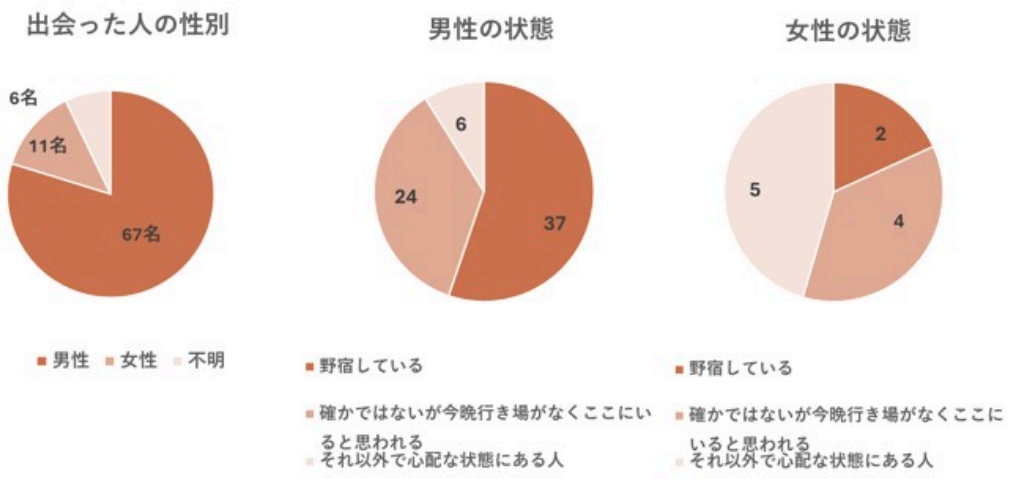
「私のまちで東京ストリートカウント2024秋」では合計で83名の心配な状態にある人との出会いがありました。その中で、「野宿している人」が44名、スーツケース等大きな荷物をもってベンチに座っていたり、駅の階段に座り込んでいたりする「確かではないが今晩行き場がなくここにいると思われる人」が29名確認されました。合計で73名の人々が、少なくともその晩は屋外での不安な居住状態にあることが確認されました。

その他にも、夜中の歩道を一人で歩かれている高齢の方など、参加者が歩いている中で気になった「それ以外に心配な状態にある人」が10名確認されました。この状態の人は全体の12%と前回の冬開催（8%）と比較して、若干多い結果になりました。秋の開催は比較的過ごしやすい気温であった為、屋外で夜を過ごす選択をする方が多かったと考えられます。

出会った人の性別では男性が67名、女性が11名と男性の方が多い結果となりました。

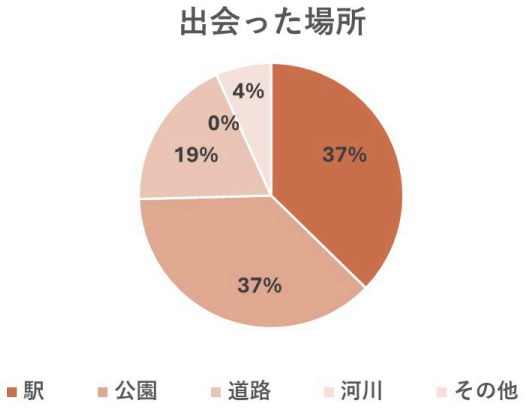
また、男性で「野宿している人」は37名、「確かではないが今晩行き場がなくここにいると思われる人」は24名、「それ以外で心配な状態にある人」6名と、「野宿している人」が半数を超えました。

一方で女性で「野宿している人」は2名で、「確かではないが今晩行き場がなくここにいると思われる人」は4名、「それ以外で心配な状態にある人」は5名でした。女性は男性に比べると「野宿している人」の割合が少なく、「それ以外で心配な状態にある人」の割合が高い結果となりました。



【図】出会った人の性別ごとの人数、性別ごとの出会った人の状態

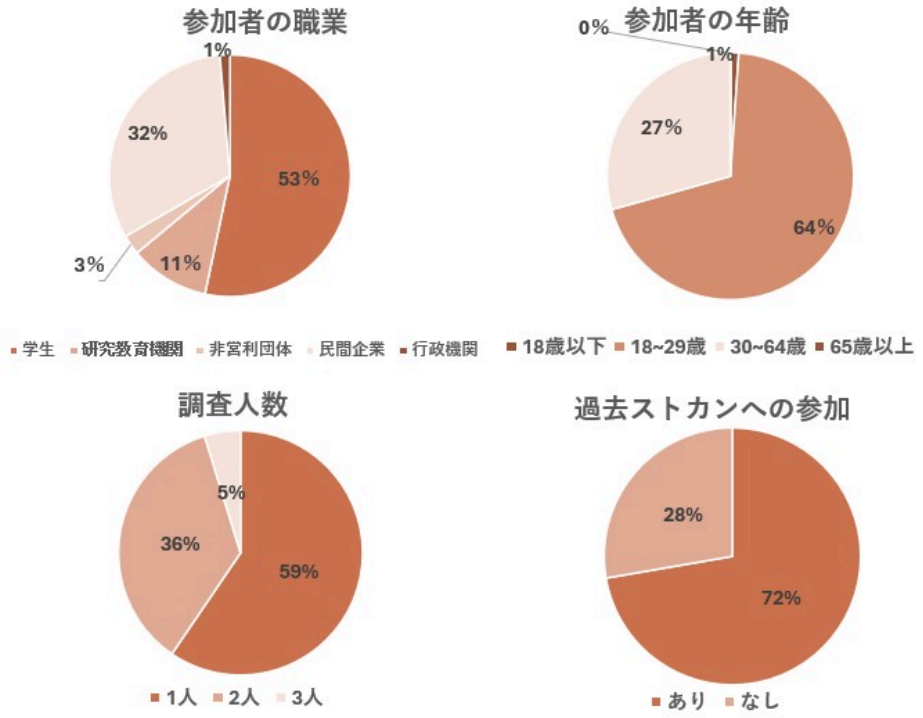
出会った場所では、駅が最も多く37%、次いで公園が37%、道路が19%、その他が7%という結果になりました。参加者の歩いたルートによって変化しますが、前回より公園の割合が高くなりました。具体的には公園のベンチ、駅地下通路などで多くの人と出会っていることが分かりました。



【図】出会った場所

◆参加者層

参加者の職業としては、学生が最も多く53%、次いで民間企業の方が32%でした。学生が多いこともあり、年齢も18～29歳の方が64%を占めました。これは過去のストリートカウントと同様の傾向でした。



【図】参加者の属性

調査を実施した人数に関しては、同伴者を伴わず1人で歩いた方が59%、次いで2人で歩いた方が36%でした。前回と比較して複数名で歩かれた方が多かったことから、秋は比較的過ごしやすい気候であり、夜間に外を歩くことに対して抵抗が低い方が多いことが考えられます。

また、今回の私のまちストリートカウントでは過去に参加したことのない参加者が28%でした。前回の報告書でも、本企画をきっかけに少しでも多くの方が「私のまち」に関心をもち、日常的にまちを見守るようになるには、新規の参加者を募ることが重要であると考察していましたが、今回新規の参加者は比較的少なく、本企画への賛同者を増やしていくことの難しさを感じました。過去参加者と新規参加者に対して、本企画に参加する意義をそれぞれに伝えていく必要があると考えました。

◆参加者の感想

【寝場所と夜のまちのギャップ】

にぎわうロータリーと対照的な寝場所。
繁華街の喧騒の中では安心できないし怖いだろう
排気ガスと騒音の中で人目に触れないようひっそりといる。
たむろする若者は寝ている人に目もくれない。
奇麗な街並みだろうと夜のまちに居場所を求める人はいる。

【野宿者の居場所への関心】

どうしてその場所を選んだのか気になった。
生物的にも人間的にも潜むのに適した場所のように思えた。
「自身がもし過ごすとしたら」という想定をしていた。
人目を避けて奥まった場所にいたので、近寄りがたい雰囲気を感じた。

【新たなまちの発見】

自分のまちにいる人を知れた。
散歩したり、徘徊したりしている年配の方がいた。
一つの公園の中で読書や宴会など様々な活動があった。
想像とは違う、暮らしているまちの姿があった。

【野宿者の増減への不安】

ホームレスの数が減っているのならばいいが、離れているだけならむなしい。
見かけなかったことはよいことだと信じたい。
高架下空間の活用になるが、居場所が減っている。
明らかに冬よりも多く、ショックを受けた。

【昼と夜で表情を変えるまち】

昼は家族連れのいる東屋で寝ている方がいた。
昼しか知らなかった公園にこんなに人がいるのかと驚いた。
今夜の遭遇でいつもの公園の印象が変わった。

【野宿者が追い出されていないことへの安堵】

「あの人」が変わらずいてくれたことに安堵する。
前回会った人が変わらずいたことにいたたまれなく感じたがほっとはした。
「あの人」が変わらずいてくれたことに安堵する。

【昼と夜のまちをつなげて考える】

昼にもよくいるとのことなので日中も気にかけたい。
日中に見かけた心配な状態の方と遭遇した。
衰退しつつある地域の様子が夜の風景に表れている。

【図】参加者の感想（項目まとめ）

今回の私のまちストリートカウントの参加者の皆さんに感想をお聞きし、50人の方から回答をいただきました。
感想全体を分析し類似するものをまとめ、大きく分けて7つの分類に整理しました。

今回は、参加案内の文章内に“昼に子供たちの遊んでいる公園に、夜ひっそりと寝ている人がいるかもしれません”という文章を入れたことを反映してか「寝場所と夜のまちのギャップ」や、「昼と夜とで表情を変えるまち」、「昼と夜のまちをつなげて考える」に関する感想が多くみられました。参加された皆さんが昼と夜のまちの様子の違いに気づきを得たことがわかります。こうした気づきが、夜のまちの見守りへの第一歩となることを期待しています
また、今年の１月に行った前回の「私のまちストカン」に参加された方も多かったため、季節の変化や時間の経過を通じての「野宿者の増減への不安」や「野宿者が追い出されていないことへの安堵」に関連する感想も見られました。また、今までの「私のまちストカン」に引き続き、まちの中にある排除デザインへの気づきや気温などを通して「野宿者の居場所への関心」がみられた感想や、まちが寝静まっているときに歩くことで得られる「新たなまちの発見」についての感想も見られました。

以下に感想の一部をご紹介します。

【寝場所と夜のまちのギャップ】
「いかに綺麗な街並みを実現しようとしても、夜の街に居場所を求める人は事実であり、私がカウントした20人以上の方も開発や工事で変わりゆく景色を複雑な心境で眺めているのでは無

いかと感じられました。」

「高架下の中央分離帯に行くと、そこには野宿されている人がいた。排気ガスと騒音、振動の中、人の目に触れないようにひっそりと隠れて暮らしている。」

【野宿者の居場所への関心】
「その方がどうしてこの場所を選んだのかということが気になった。周りからの目を気にしているのか、物音がしなくて居心地がいいからなのか、とその人に対して色々と考えを巡らせることができた。季節によってホームレスの方への見え方が変わってくることに気づくことができた。」

「心配な状態にある人たちは、公園や駅近くのベンチがある場所でバスの時刻表や樹木などの目隠しになるようなものが近くにあるところに居ることが多いなと気づいた。駅や公園近くということもあり、人通りが少ない訳では無いが少し奥まったところにいるので、見つけてもなにか近寄り難いような雰囲気を感じた。」

【新たなまちの発見】
「雨が降ったりやんだりしていた天候にも関わらず同じ公園内にはお酒とおつまみで飲み会をしているグループや、暗がりで静かに本を読む男性もいて、そのコントラストが印象的だった。視線は通らないが、多くの活動を受け入れるいい公園なのかもしれないと思った。」

【野宿者の増減への不安】
「通り上の植え込みには相変わらず荷物が散乱していたが、前回よりも荒れていた。人が離れてしまったのかもしれない。スタジアムまわりは相変わらず漂白された無機質な感じ。ホームレスの数が減っているのなら良いが、ホームレスが離れているだけなら虚しい。」

「最後に訪れたタクシーロータリーには、明らかに冬の調査よりも多くの人たちが野宿していたため、かなりショックを受けた。」

【昼と夜で表情を変えるまち】
「昼間の顔しか見たことなかった公園のベンチは夜になるとこんなにも人が増えるのかと驚いた。駅よりも公園の方が多かったことにも驚いた。」

【野宿者が追い出されていないことへの安堵】
「“あの人”が“この場所”にいる、ということを確かめるのも、主要駅ストカンでは心配が募りますが、わたしのまちストカンでは無事に居てくれたことに安堵する、そんな感じがしました。」

「前回出会った人がいた公園にまた同じ方と思われる人がいた。野宿されている状況が変わっておらず、昨年の冬からずっと同じ場所にいたかもしれないことがいたたまれないと感じる一方で、排除されずに同じ場所に安定して居続けられていることにほっとする気持ちとがあり、どう感じてよいか分からなかった。」

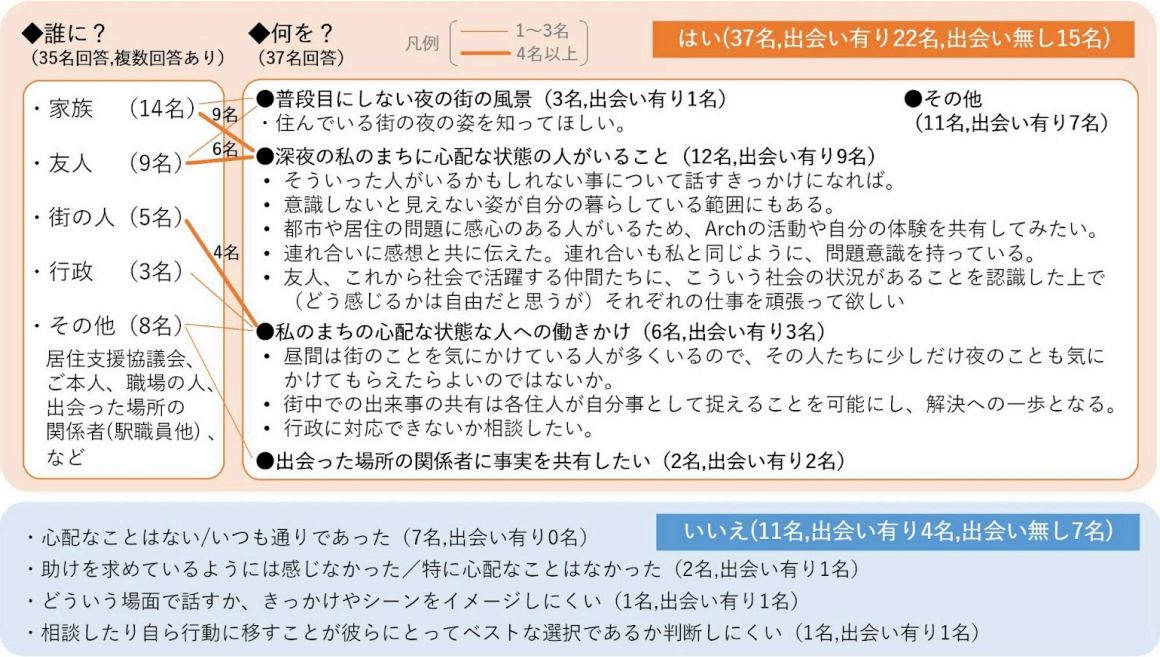
【昼と夜のまちをつなげて考える】
「80年代に一斉に開発された地域の衰退、高齢化が、夜の心風景にも現れていると感じました。」

「近隣の大きな公園には排除デザインが施されていないベンチもたくさんあり、ホームレスの方がいらっしゃってもおかしくないなと思っていました。しかし、実際に夜に行ってみると、結構明るく、そのためホームレスの方がいらっしゃらないのだと考えました。」

※上記の感想は本人からの掲載許可を得ています。また、一部個人情報に関わる文言や特定の場所に関わる文言は削除しました。

○新たな質問の分析　～経験の共有～

参加者のみなさんに、「私のまちの深夜を歩いて気がついたまちの様子や、出会った心配な状態にある人について誰かに伝えたり、相談したいと思いましたか？」という質問を行い、48名の方から回答をいただきました【下図】。



「はい」と回答した方が37名、「いいえ」が11名と、約8割の方が経験を共有したいと回答していました。それぞれ出会った方の有無をみると、「はい」では約6割が出会い有り、「いいえ」では約６割が出会い無しとなり、出会いの経験が誰かとの経験共有の意向の要因になっている可能性が指摘できます。

「はい」と回答した人のうち、誰に共有したいかを聞いたところ、「家族」が最も多く（14名）、以下「友人」（9名）、「街の人」（5名）と続き、自分の身近な人に共有したいという意向がうかがえます。

何を共有したいかを聞いたところ、「●深夜の私のまちに心配な状態の人がいること」は12名と最も多く、次いで「●私のまちの心配な状態な人への働きかけ」が6名となりました。前者は、出会いのあった方が9名と多く、「家族や友人に、意識しないと見えない姿が自分の暮らしている範囲にもあるということ、同じまちを共有していることはまずは気づいて欲しい。」や「自分の住んでいるまちを知っていて信用できる人たちに、何となく共有したいと思ったから。」など、身近で信頼できる家族や友人に、自らが体験した私のまちの現状を伝え、共有したい意向が確認できました。また、ホームレス状態や居場所のない人が深夜の路上にいることに問題意識を持っている家族や職場の人に共有したいという意見もありました。ホームレス問題という自分に関わりある問題だと捉えにくいことを、信頼できる身近な人々や同じ問題意識があるとわかっている人に共有したい、という意見が多くみられました。一方で、「友人と渋谷や新宿を歩くことが多いが、駅には昼や夕方にもホームレスの方をよく見かける。しかし（中略）、ホームレスの方がいることについて話したことはなかった。無意識のうちに見ないようにしていた気がする。ストカンを行うことで、以前よりホームレスの方の様子を気に掛けるようになったので、友人にも考えを共有したいと思った。」といった感想も見られ、ストリートカウントの経験が、勇気をもって経験を共有してみようと考える契機になっていると言えそうです。後者の「●私のまちの心配な状態の人への働きかけ」では、「近所の人。できるだけ多くの人が少しずつ気にかけることが大切ではないかと思った。」や「地域でまちづくりに関する取り組みをされている方とお話をしたい。」など、何らかの働きかけをするために、私のまちの人々に経験を共有したいとの意見がみられました。これらは家族や友人ではなく、仲の良い商店街の方や近隣の方、行政など問題への働きかけに適した人を挙げている方が多くいました。

ほか「●出会った場所の関係者に事実を共有したい」では、「心配な状態にある人がいた公園の周辺を普段から利用する誰かに、何かをしてほしいとかではなく、まずはその事実を知ってほしいと感じました。」など、出会った場所の関係者との共有を望む声も聞かれました。

「いいえ」と回答した人では、出会いの無かった人は「心配なことは特にない。」などの理由が多くみられましたが、出会いの有った方で「相談したり自ら行動に移すことが彼らにとってベストな選択であるか判断し難いから。」など、距離感のあるホームレス問題に対してどのように対処するのが適切なのか判断が難しいとの意見が見られました。

◆今後に向けて

ARCHは2021年から、屋外での滞在が厳しい夏と冬に「私のまちで東京ストリートカウント」を計3回実施してきました。こうした夜間路上実態調査が実施されることで、はじめて主要駅周辺や繁華街以外の住宅地などにも不安定な居住状態の人々がいる、という問題を提示することが出来ます。

今回は初めての秋開催となりました。比較的屋外で過ごすことが容易な秋は、不安定な居住状態である方以外との出会いも多かったのではないでしょうか。また中秋の名月の頃、時に空を見上げ、おなじ月の下を歩いている仲間がいることを強く感じながら「私のまち」を共に見守ることが出来たように思います。調査結果としては、これまでと比べると、出会いのあった「私のまち」の割合は減少傾向にありました。それでも、参加者が見守ったまちの半数弱のまちで居住が不安定な方と出会っていることが確認されました。また、比較的屋外で過ごすことが容易な季節だったこともあり、不安定な居住状態である方以外との出会いも若干多い結果となりました。

今回は参加してくださった方々に対して、「私のまちの深夜状態を歩いて気がついたまちの様子や、出会った心配な状態にある人について誰かに伝えたり、相談したいと思いましたか？」という自身の経験を共有することへの考えを聞きました。回答からは、家族や友人といった既存の信頼出来るコミュニティに対して共有したいという思いがある一方で、個人情報や生活に密接に関係する重要なことだからこそ、簡単には仲間を見つける行動に移すことが出来ないといった課題もあるように感じました。そういった方々が仲間を見つけたいと思った時に、一緒にまちを見守る入口を見つける、その架け橋（ARCH)となれるような取り組みを行いたいと思っています。

また、今回の参加者層をみると新規参加者が3割弱と、活動の広がりには課題があると言えます。新規の参加者を募るために、彼らの気持ちに訴えかけることが出来る時代に即した本企画の意義を考えたいと思っています。同時に、継続して本企画に参加してくださっている方々と私たちARCHが共に、次に何が出来るのかについても考えていきます。

「私のまちで東京ストリートカウント2024秋　-おなじ月の下を歩く-」

活動報告書

〈発行日〉　2025年2月

〈制　作〉　ARCH (Advocacy and Research Centre for Homelessness)

〈連絡先〉　arch.cd.office@gmail.com

〈郵便送付先〉　東京都目黒区大岡山2-12-1

東京科学大学　環境社会理工学院　土肥研究室気付

〈リンク〉　ARCHウェブサイト：http://www.archomelessness.org